高等学校外国語科学習指導案

日　時　令和６年 11 月８日（金）
　　５校時
対　象　１年１組（40 名）
学校名　北海道函館中部高等学校
授業者　教諭　田畑　健太
場　所　本校１年１組教室

１　単元名
英語コミュニケーションⅠ　Lesson８ The Best Education to Everyone, Everywhere
教科書：Landmark Fit English Communication Ⅰ

２　単元の目標と評価基準
⑴　単元の目標
ある社会起業家に関する説明を聞いたり読んだりして、概要や要点、詳細を捉えるとともに、その内容や言語材料を活用して自分の考えをまとめ、話したり書いたりして伝え合うことができる。
⑵　CAN-DO リストとの関連
ア　W1a 自分の意見を、具体例や理由を併せてまとまりのある文章が書くことができる。
イ　E1c 身近な話題についてリサーチした内容を論理的にプレゼンテーションできる。
⑶　単元の評価基準

評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準（話すこと（発表））	・情報や考えを述べるために必要となる語彙や表現、音声等を理解している。 ・日常的な話題（労働観）や社会的な話題（社会問題の解決）について情報や考えを客観的な情報を含んだ論理的に説得力のある理由とともに話して伝える技能を身に付けている。	聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、日常的な話題（自分の労働観）や社会的な話題（社会問題の解決）についての情報や考えを聞いたり、読んだりしたことを基に、論理的に説得力のある理由とともに話して伝えている。	聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、日常的な話題（自分の労働観）や社会的な話題（社会問題の解決）についての情報や考えを聞いたり、読んだりしたことを基に、論理的に説得力のある理由とともに話して伝えようとしている。

３　指導にあたって
⑴　教材観
ある社会起業家についての説明文[1]である。このレッスンは 500 words であり、4 パート構成となっている。Part1 はどんな仕事に関心があるか、どの点に注目して職業選択をするかという職業観に注目した発問と社会的起業家の定義を説明している。Part2 は事例として日本人の社会起業家がバングラディシュの教育環境に改善点を見出し、現地の高校生にカリスマ講師の授業の DVD を送付した e-Education の事例を紹介している。Part3 は Part2 の影響と、2 つ目の事例としてフィリピンの事例を紹介している。Part4 はその社会的起業家が高校生にターゲットにした理由が書かれており、最後に他人や社会のために何をしたいかを読者に投げかけている。この単元は社会的起業家の活動をとおした社会貢献や教育格差について考えを深めるのに教育的に有益であると考える。教材内容を３つの概念[2]に分けることとし、この概念の獲得や深化を意図している。
概念１　社会問題は社会貢献により改善できる。
このことを e-Education の事例、ナイチンゲールの事例等の複数の例から導き出す。
概念２　教育格差は社会問題であり全員が当事者である。
このことを本文読解時に発問として生徒に問い、考えを深める。
概念３　発明は必要があるところから生まれる。（発明は必要の母）
この考え方を軸にして生徒は自らの設定した課題（ビジネスプラン）について考えを深める。
単元末には自分自身が発見した社会課題をどのように解決するかを提案するグループプレゼンテーション活動を行う。多様な意見が想定される一方、その分生徒が自身で自己決定・自己選択をしなければならないことも多く、次の点を留意する。

[1] 本指導案ではテキストのジャンルは文部科学省(2018, p.46) に基づき説明文を「幅広い話題について、主に事実に基づいて書かれた文章」とする。
[2] H. Lynn Erickson, Lois A. Lanning, &. Rachel French (2017) の概念型探究のフレームワークでは、“generalization（一般化）” にあたる。

1　困った経験や、困っている人を見た経験から社会にできることを考える。
2　困っている人を助けるという観点を重視し、起業そのもの（資金繰り等）にそれほど関心を向けない[3]。
3　毎授業で、振り返りの観点として自分の困りごとについて考えたり、他者に伝えたりする時間を設ける。
4　アイディア創発と見通しを持つことを目的として単元末に行う活動を単元の冒頭で提示する。

⑵　生徒観

学校教育目標は『高い志をもち、次代を創造する人間の育成』である。教科の外国語科に引きつければ、多様化する国際社会において、他者と協力しつつ物事を成し遂げ、郷土の伝統と文化を尊重しつつ異文化を理解し、世界的視野で活躍できる人を育てることを目標としている。

現所属の１学年は学びの型を身に付けることを指導の目標としている。具体的には、自律までの過程を『守破離』、１学年を多様な学習の型を学ぶ『守』の時期としており、卒業時には生徒それぞれが自ら最適な学習方法を選択し、実践できるような見通しになっている。

生徒一人一人に大きな力があるので、その力を発揮できるように学びの責任を少しずつ移行して、主体的に生徒が自己選択・自己決定できるように授業を設計するようにしている。そのためには、できるだけ指導の意図や価値を生徒と共有しようとしている。

今回授業するクラスは習熟度別も、進度別の編成もしていない普通科の１学年の生徒である。選抜性の高い大学に進学を希望する生徒が多い。習熟度については CEFR 換算で B1 の生徒から A1 程度の生徒まで多様である。概ね英語への動機づけが高い生徒が多く、４技能いずれも積極的に取り組む生徒が多い。

⑶　指導観

私自身の英語指導全般の指導観と探究的な学びにおける指導観、ICT にかかる指導観の３つに分けて説明する。目の前の生徒には、生涯に渡って、社会のどこかに自分の居場所があって、なければ作ることができて、良好なコミュニケーションを実践できるようになってほしいと考える。というのは、現在目の前の生徒や不穏なニュースを見たり聞いたりしていると、集団や社会から離れ、自身の居場所を失い、孤立感を抱え、自身が社会で活躍していないと感じていることが原因なのではないかと推測してしまうことが多いからである。また、ニュースにならないまでも同様な気持ちを抱き学校生活を送っている生徒は多いと思う。人生を通じて、どのような形でも社会とつながりを持ち続ける（stay socially connected）ことは、自分のためにも、他者のためにも、心身健康に生きるために必要なことであると思う。公教育である高校英語授業で生徒に教えられることは、日本語とは異なる英語という言語のコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせて、自身の考え方や発想を豊かにしつつ、他者との交流を通じて、自身と他者との意見、価値観の違いや共通点を把握し、よりよい社会を築くための、そして、個人では解決できない大きな課題を協働して解決するための態度と技術を習得できるように支援することではないかと感じている。そしてゆくゆくは、高校時代に英語授業で経験したコミュニケーションの体験や実践が、卒業したどこかの時点で発揮されて、心地よいコミュニケーションの担い手として地域社会やグローバル社会で活躍できるようになってほしいと思っている[4]。そのためには、「良好なコミュニケーションは自然発生しない」（ちょん, 2022）という前提に立って英語授業を設計することが必要だと考えている。英語授業にはペアワーク、グループワークなど様々な活動形態があるが、全て生徒の手に委ねるのではなく、発言力のある生徒もそうでない生徒も、口数の多い生徒も、そうでない生徒も平等に話し合いに参加できるように進行の段取りや授業の組立てを行う必要があると感じている。例えば、言語活動を行うときには、初期の段階では教員の介入を多めに行うようにする。一方で、卒業前には自律的な学習者になることを期待して教員の介入を極力減らすことが大切だと考えている。そのヒントになるのがファシリテーション(中野, 2001; ちょん, 2016; ちょん, 2022; 大場, 2020）の考え方や協同学習（Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J., 2002; 杉江 2011）であると考えている。

次に、探究的な学びに関する指導観である。探究的な学びの定義をここでは探究の４つのステップをもとに授業を構成しているものとする[5]。つまり、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」のステップで授業を展開するものとする 。近年、総合的な探究の時間だけではなく、各教科・科目においても探究的な視点で授業を構成することが求められている。鈴木(2022)は探究的な視点を取り込む教育の必要性を次のように書いている。「日本のような国では、新しい価値を作り出すことが急務だからだ。（中略）何かを新た

[3] なお、困っている人を助けることについては Lesson５ “Bailey the Facility Dog”（8 月実施）において取り上げている。
[4] 亘理(2019)は外国語科における教育目的を次のようにしている。「外国語科は、自他にとって心地よいコミュニケーションとはどのようなものかについて考え、ことばを駆使してそれを実践するための教科」(p.15) としている。
[5] 英語授業において「探究的な授業」の定義は厳密には決められてきてはいないように思える。実際、松下・山田(2022) では、高等学校外国語科における探究的な学びについて豊富な実践を紹介しているが、それについて明確な定義されていない。しかし、提案されている授業の単元構成を見る限り、探究の４つのステップに沿い授業が展開されることから、結果的にこのステップに沿うことが外国語科における探究的な学びと定義されていると解釈できる。

に作り出す、つまり、創発させるためには創発的な視点を取り込む教育は必須であると思う。」（鈴木，2022，p.212）である。基礎基本の「知識・技能」を大切にしつつも、実社会との関連と「思考力・判断力・表現力」に焦点を当てた探究的な学びを展開することは社会の形成者を育成する上で大切なことではないかと思うからである。認知科学によれば、創発に至るためには「練習を通した学習、発達、ひらめき等の認知的変化（学習）は、複数のリソースが存在し、それらが競合、協調を積み重ねながら揺らぎ、状況、環境と相互作用しながら、進んでいく」（鈴木，2022，p.171）と結論づけている。つまり、複数の要素を考慮に入れながら、それらを整理したり、分析したりしながら、自身が対象に働きかけたり、その働きかけ後の反応を見たりした結果として、学習は直線的ではなく、うねうねと蛇行し、揺らぎながら進んでいくということになる。私は生徒の探究的な学びは探究の４つのステップを繰り返し、スパイラル状に発達を遂げていくうちに、いずれその「独自性」や「新規性」が発揮されていくのだと捉えている[6]。

しかし、探究において「独自性」や「新規性」を発揮することは大切なことだと思うが、これ自体を教科内で展開される探究的な学びの時間において追求することは、かなり高度な活動であり、難易度を調整する必要があると感じる。北海道教育委員会・北海道大学による令和５年度「探究チャレンジ・ジャパン」の審査票においては、「探究活動の独自性」は探究の４つのステップとは別に評価規準を指定しているほどである。私は各教科の枠内で実施される探究的な学びにおいて力点が置かれるべき指導は、探究の４つのステップが互いに論理的な整合性を持っていたり、妥当な根拠をもとに説得力ある結論を導き出せていたりするかを見取ることではないかと感じている。

最後に、ICT を用いた指導観である。私は ICT の使用についてはあまり実践例がないが、３つのことに気を付けている。１つ目はできるだけ毎回の授業で使うことである。普段使いをすることによって、生徒が ICT 端末の使用に慣れるようにしたい。２つ目は生徒と共に使い方を学ぶことである。生徒によっては中学生１年生から１人１台端末を使用している。生徒を頼りつつ、一緒に使い方を学んでいる。３つ目は教具の適切な使い分けである。指導の目的によって、学習を促進する教具は異なると考えている。指導の目的によっては、プリントが学習を促進することもあれば、ノートが促進する場合がある。また、ホワイトボードが促進する場合もあれば、１人１台端末が促進する場合もある。授業の目的に照らし合わせて、生徒にとって適切な教具を選択したいと思っている。現在のところ、私は教具の使い分けのタイミングは次のように捉えている。

媒体	長所	短所	特徴的な言語使用場面
プリント	・情報の認識のしやすさ ・加筆のしやすさ ・黒板に貼れば情報が残る	・管理の煩雑さ ・印刷・配付の必要（カラー印刷のコスト） ・忘れたときの対応と欠席時の対応	・書き取り ・１段落未満のライティング ・パフォーマンステスト
スライド	・カラーで情報を提示できる ・板書が不要	・授業の展開に合わせられない ・情報が残らない	・絵や文字の提示
ノート	・振り返りの蓄積 ・プリントの蓄積（ノートに貼付時）	・グループ内共有しにくさ	・振り返り ・添削ありのライティング
ホワイトボード	・アイディアの発散のしやすさ ・グループ内共有のしやすさ ・綴りへの意識が向きやすい ・絵や図示のしやすさ	・情報の蓄積のしにくさ ・用具の準備	・アイディアのメモ ・相手の意見を書く ・イラストを描く ・相手のアイディアの言及
１人１台端末	・カラーで情報を提示できる ・集約の効率性 ・改行など大幅な書き直しができる ・全体共有のしやすさ ・提出物の管理 ・欠席生徒の対応の行いやすさ ・落ち着いた教室での自己表現	・技術的な問題への対応 ・綴りへの意識の向かせにくさ ・個人情報への配慮 ・タブレット忘れや充電不足の対応	・相手へのコメント ・フラッシュカード ・絵並べ替えタスク ・情報ギャップタスク ・相手のアイディアの言及 ・２段落以上のライティング ・多様なアイディアの共有

[6] 「探究」において、「独自性」が求められることがあるが（北海道教育委員会・北海道大学, 2023）、ここではそれ自体を授業の目的としては設定しない。あくまで独自性は結果的にあればよいかもしれないが、必ずしも伴わなくてもよいものした。探究の４つのステップが妥当に踏まれていればよいと判断する。

4　単元の指導と評価の計画（計７時間）

時間	ねらい（■），言語活動等（丸数字）	知	思	態	備考
1	■授業ルールの共有 ■ウォームアップ ①Du03.0 を用いた練習・表現活動（帯活動） ②Small talk ■単元に関する背景知識の活性化 ①Lesson8 に関するオーラルインタラクション 　主な発問 　What are your criteria for choosing a job? Which of the following things do you think is the most important? High salary / People in the workplace / how much you like the job ■単元全体の概要の理解 ①絵並べ替えタスク（インプットタスク） 　時系列に沿ってペアで協力して聞こえたとおりに Google Slide で並べ替える。２回放送する。 ※視覚的補助（絵カード）を用いたリスニング活動 ■単元全体の語彙の理解（Part1-4） ①本文を読解する上で必要となる新出語彙の導入 ②スライドを用いた定義・用例の確認 ③フラッシュカードを用いた語彙の認識練習 ■単元末の活動の確認 ①単元末課題の共有 ②ビジネスプランに取り組む高校生を取り上げた動画を見る。【特集】名門・灘高校の１年生４人組が挑む『ビジネスプラン全国大会』９人家族の子がお母さんのために発案...練り上げたプランとは？（2022 年 1 月 11 日） (https://www.youtube.com/watch?v=F_Y1RE1BtQo)	一斉に記録に残す評価は行わない。ただし、ねらいに即して生徒の活動の状況を見届けて指導に生かすことは毎時間行う。			・授業の後半を、単元末活動に向けて課題に取り組む時間とする。 ・視覚的な補助を用いながら、本文全体をとおして、推論を働かせながら並べ替える。 ・フラッシュカードで新出語彙の確認をペアで行う。 ・動画をみることによって単元末評価課題の内容やグループプレゼンテーションのイメージを共有する。
1	■授業ルールの共有 ■概要の確認 ①各班で４人グループとなり、担当のパートのキーワードまとめる。 ②キーワードを活用して、担当のパートを口頭で要約する。 ③担当外のパートの口頭要約を聞く。 ④口頭要約後、理解確認のための質問等をする。 ※概要を伝えていればよいとする。 ⑤生徒とのインタラクションをとおして概要を理解するのに必要な情報（重要概念）を確認する。 ※重要概念：社会起業家、貧困、仕事、教育 ■詳細の理解（Part1-4） ①教科書各パートの詳細を確認する。（全体） ②語彙の確認（Part1-4） 　各自の端末で Google スライドを用いてペアで語彙の確認をする。（個人で暗記→ペアで出題） ■単元末の活動の確認 ①提示された単元末に行う活動を理解する。 ②これまで自分や周囲にどのような困りごとがあったかをと英語でその経験をミニホワイトボードで共有する。				・Part1-2 に絞り、詳細を理解する活動とする。 ・リテリングや語彙の確認は繰り返し行い、定着を図る。 ・概念２を深めるために日本の教育格差について補足的に参照する。 ・困りごとを軸にして、「こんなことがあったらな」と思った事例をエピソードベースで共有する。 ・ミニホワイトボードを使って、ペアでインタビューをとおして互いの経験を聞き合う。
1	■授業ルールの共有 ■概要・詳細把握の確認				・Part3-4 に絞り、詳細を理解す

	①Part1-Part4 までの概要を絵カードをとおしてペアに伝える。 ※絵カードの絵は画像生成されたものを使用する。 ■概要の確認 ①生徒とのインタラクションをとおして概要を理解するのに必要な情報（重要概念）を再確認する。 ■詳細の理解（Part1-4） ①語彙の確認（Part1-4） 　各自の端末で Google スライドを用いてペアで語彙の確認をする。(個人で暗記→ペアで出題) ■単元末の活動の継続 ①e-Education の事例が探究のサイクルにどのように当てはまるかという観点から情報を整理する。 ②これまで自分や周囲にどのような困りごとがあったかを考え記入する。 ③ペアでどんな困りごとがあったかを共有する。 ■困りごとから発明につなげた事例を知り自身のプレゼンのアイディアの材料とする。 ①フローレンス・ナイチンゲールの略歴や偉業を聞く。 ②読みながら空所にワークシートに記入する。	一斉に記録に残す評価は行わない。ただし、ねらいに即して生徒の活動の状況を見届けて指導に生かすことは毎時間行う。			る活動とする。 ・教科書に掲載されているナイチンゲールを取り上げる。 ・教科書で扱った事例を探究のサイクルを軸に整理する。
1	■授業ルールの確認 ■困りごとから発明につなげた教科書に掲載されていない事例を知り自身のプレゼンのアイディアの材料とする。 ①４人の社会的起業家の英文(200words 程度の CEFR A1-A2 レベル）を読み、Google ドキュメントに整理する。 ※１　１班３～４名とし、全 10 班を編成する。 ※２　取り上げる社会的起業家は４名とする。 ■単元末の活動の継続 ①「企画会議」 　グループ内で個人が考えた意見をホワイトボードに書き出して共有し、合意形成をする。 ②グループ間で話し合った結果を共有する。 　プレゼンター役の生徒は他班に移り､別の班のメンバーに会議で決まったことを共有する。(ワールド・カフェ[7]のアレンジ版)				・概念１、３を獲得や深化するために､教科書の掲載されていない複数の事例を取り扱う。 ・個々で考えたアイディアを全体で共有し､合意形成を行う。
１～２	■授業ルールの確認 ■ウォームアップ ■単元末活動の継続 ①各グループで最終準備を行う。 ②グループでリハーサルをする。				
後日	■パフォーマンステスト 話すこと（発表）	○	○	○	
	書くこと（B 考査） 本単元に関係する話題について意見文を書く。		○		
	読むこと（B 考査） 本単元に関係する話題について初見の英文を読んで答える。		○		
	聞くこと（B 考査後） 本単元に関係する話題について聞いて答える。	○	○		

[7]「ワールド・カフェは、1995 年に Juanita Brown（ワニータ・ブラウン）らによって偶発的に生み出され、その後、発展・精査され 100 人や 1,000 人を超える大規模な人数に対して１人の進行役で対応できる半構造化された対話のプロセスです。多くの人々がグループに分かれながら同時に対話を進め、またお互いの意見を知ることで集合的な知恵を生み出していくことに特徴を持ちます。」(西村，2019)

５　パフォーマンステストの実施計画

科目	英語コミュニケーションⅠ（１年生）
領　　域	（●）話すこと［発表］　（　）話すこと［やり取り］　（　）読むこと　（　）書くこと
関連する CAN-DO リスト	W1a 自分の意見を、理由や具体例を併せてまとまりのある文章が書くことができる。 E1c 身近な話題についてリサーチした内容を論理的にプレゼンテーションできる。
実施内容	あなたとクラスメートの３人は、ビジネスコンテストに参加することになりました。身近に感じた困りごとを解決するプランを提案します。 １　４人で役割を分担してプレゼンテーションをします。 ⑴　現状報告係（２名）：現状の問題の深刻さを信頼できるデータを用いて伝えます。 ⑵　提　　案係（２名）：現状を踏まえ、プランを提案します。 ※　３人で行う班は現状報告係を１名とします。 ２　グーグルスライドを用いてプレゼンを行います。 ※　使用は任意とします。 ※　スライドは最低限の情報があればよいため、凝りすぎないで作りましょう。 ※　共同編集機能を用いると便利です。 高校生らしく伸び伸びとした挑戦的な提案を求めます。したがって、実現可能性の低さや資金繰りの見込みの低さ等は成績評価には影響しません。 また、学校で困ったことを解決するようなプランでも構いません。 ３　プレゼンテーション終了後に質問・コメント時間を設けます。 ⑴　積極的に質問しましょう。
実施方法	発表・やり取り形式：教室内で発表 発表：２～３分間 質疑応答：１分間 個人・ペア・グループ：基本４人グループ（座席順） メモ：参照可
単元構成	１～４時間目　教科書を主に用いた活動 ５～６時間目　探究的なグループプレゼンテーションの準備 ７時間目　　パフォーマンステスト

採点の基準

単元をとおして指導したことを踏まえ、次の採点の基準によって評価する。「思考・判断・表現」については、三つの条件を全て満たしていれば「b」（おおむね満足できる）としている。

「思考・判断・表現」についての三つの条件

条件１：現状の課題を分析し、それが解決されるべき問題であることを示している。 条件２：改善プランを根拠とその重要性ともに提案している。 条件３：具体的なターゲット（顧客等）を想定している。

	知識・技能	思考・判断・表現	態度
a	・語彙や表現が適切に使用されている。 ・聞き手にわかりやすい音声等で話して伝えている。	三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを詳しく述べて伝えている。	三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを詳しく述べて伝えようとしている。
b	・多少の誤りはあるが、理解に支障のない程度の語彙や表現を使って話し手伝えている。 ・理解に支障のない程度の音声等で話している。	三つの条件を満たして話して伝えている。	三つの条件を満たして話して伝えようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

6　パフォーマンステストにおいて想定される生徒の発話及び採点の結果の例

(1)　グループ A

通番	発話者	発話内容
1	現状報告係１	Imagine this: during lunch break, instead of chatting with friends, you see almost everyone looking down at their phones. Does that sound familiar? Today, we want to talk about smartphone use in our school and how it’s affecting us. Many students spend their break times on their smartphones. In fact, a recent survey shows that 60% of students use their phones for more than two hours while at school.
2	現状報告係２	This isn’t just a small problem. Using smartphones too much can make it harder for students to focus on their studies, and it can also make their eyes feel tired. More importantly, it limits face-to-face conversations with friends, making our breaks less social and enjoyable.
3	提　　案係１	So, what can we do about this? Our solution is to introduce ‘smartphone-free times’ at school. For example, we suggest a no-phone rule during lunch breaks to encourage students to talk and connect with each other more. The best part about this plan is that it costs nothing. We only need to change the school rules and make announcements. Furthermore, we can work together with students and teachers to create posters and promote the idea—all without spending any money.
4	提　　案係２	Face-to-face conversations are very important for building strong relationships. According to a study, talking in person helps people understand each other’s feelings better, which improves trust and communication. Research also shows that these personal connections can reduce stress and create a more positive school environment. Our target audience is all students in the school. We want everyone to understand the benefits of reducing smartphone use and how it can improve our school environment. In conclusion, because this plan requires no money, it’s easy to put into action. If we try it, students will be more focused in class and develop stronger friendships during breaks. Let’s take action and use our smartphones wisely!

５の採点の基準に沿って、全ての観点で「a」と評価する。

⑵　グループＢ

通番	発話者	発話内容
1	現状報告係１	Hello, everyone. Today, we would like to talk about smartphone use in school.″ First, we have noticed that many students use their smartphones during break time. Some students check social media, and other students play video games. In fact, according to a survey, 60% of students spend more than two hours on their phones during school hours.″
2	現状報告係２	This isn’t just a small problem. Using smartphones too much can make it harder for students to focus on their studies, and it can also make their eyes feel tired. More importantly, it limits face-to-face conversations with friends, making our breaks less social and enjoyable.
3	提　　案係１	So, how can we solve this problem? Our idea is to set ‘smartphone-free times’ during school. For example, we suggest having a no-phone rule during lunch breaks. This way, students can focus more on talking to each other face-to-face. What’s great about this plan is that it does not need any money. It only requires a change in school rules and some announcements. Plus, we can let students and teachers work together to create posters and talk about the idea, all without spending a single yen.
4	提　　案係２	The main people we want to reach are all students in the school. We hope everyone will understand the good points of using smartphones less and the positive impact. In the end, because this plan doesn’t require any money, it’s very easy to start. If we try it, we believe students will be more focused in class and have better friendships. So, let’s work together to use smartphones in a smarter way!

５の採点の基準に沿って、全ての観点で「b」と評価する

⑶　グループＣ

通番	発話者	発話内容
1	現状報告係１	Hello. Today, we talk about smartphones in school. Some students use smartphones during break time.
2	現状報告係２	Using phones a lot may not be good. It can stop studying.
3	提　　案係１	Maybe we can try ‘no phones’ during lunch.
4	提　　案係２	In the end, we don’t know if this idea will work, but we can try. Thank you.

５の採点の基準に沿って、全ての観点で「c」と評価する。

なお、５の採点の基準において、全て「b」のみのやり取り事例を生徒に google Classroom で示す。

理由は次のとおりとする。

⑴　生徒全員に達成することを期待する「b」規準のレベルを生徒と共有するため。

⑵　教員の想定した「a」規準を超えるパフォーマンスを期待するため。

⑶　「c」規準を生徒に意識させないようにするため。

7　本時の展開（４／７時間目）

⑴　ねらい

グループプレゼンテーションに向けて、社会的な話題（社会的起業家）に関する英文を読み、そこから自分自身と関連する部分を整理・分析したりすることによって、課題の設定に活かしたり、まとめ・表現に活かすことができる。

⑵　CAN-DO リストとの関連

I1a ペアで２分程度、Follow-Up Questions を交えながら、楽しみながら会話を続けることができる。

⑶　展開

過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入 (2min)	■活動内容の確認 ①活動の内容を知り、本日の活動に見通しを持つ。	・説明を聞き、見通しを持つ。	・見通しが持てるように支援する。
展開１ (20min)	■困りごとから発明につなげた、教科書に掲載されていない事例を知り自身のアイディアの材料とする。 ①各班に割り振られた異なる社会的起業家の英文を読んで、口頭要約に必要なキーワードをまとめる。 ②班内でそれぞれの起業家がどんなことを行ったのかを１人ずつ口頭で要約する。 ③説明を聞いて、理解できなかったことや確認したいことについてやり取りをする。また、感想を共有する。 ※１　１班３～４名とし、全 10 班を編成する。 ※２　取り上げる社会的起業家は４名とする。	・社会的起業家について書かれた英文を読み、ワークシートに情報を整理して入力する。 ・担当した起業家について口頭で要約して説明する。 ・説明を聞いてわからなかったことについて質問したり、答えたりする。	・英文のレベルは辞書を使用しないで読むことができるとして、CEFR の A2-A1 とする（生成 AI を使用）。 ・複数の事例を用意して生徒が自身のアイディアを持てるように支援する。 ・クラスで手分けをして、複数の事例を集める。
展開２ (33min)	■単元末の活動の継続 ①グループの中で考えた個々の意見をホワイトボード（90×60cm） もしくはタブレットに書き出して共有する。 ②グループ内でホワイトボード・ミーティング®の会議フレーム「企画会議」を用いて話し合う。 ③発散（4min×4）で、それぞれの意見を述べる。 ④収束（3min）で、言った内容を精査する。 ⑤活用（5~7min）で、仮のビジネスプランを考える。 テーマ<Turn troubles into a good idea> 発散（黒）：身近にあった私の困りごととビジネスアイディアというと？ 収束（赤）：大切にしたいアイディアや共通のポイント 活用（青）：私たちの仮のビジネスプラン （３～４人グループ、発散→収束→活用）	・説明を聞いて「企画会議」（ちょん,2016）で行うことを理解する。 ・各グループのファシリテーターが意見を承認しながら書く。 ・OREO を意識しながらエピソードトークを行う。	・必要に応じて「９つのオープン・クエスチョンや８つの相づち」(ちょん,2016)の使用を促す。 ・机間指導し、やり取りを観察する。 ・違いだけではなく、共通性にも意識を向ける問いを設定する。 ・適宜、中間指導を行う。
まとめ (10min)	■意志決定の内容の共有（ワールド・カフェ風の活動） ①プレゼンター役の生徒は他班へ移動する。 ②プレゼンター役以外の生徒は自席に残る。 ③プレゼンター役以外の生徒は協働して異動してきたプレゼンター役の生徒に「活用」部分を伝える。 ④プレゼンター役の生徒は「活用」部分を中心に自分のいた班で決まったことを伝える。 ⑤プレゼンター役以外の生徒は発表を聞いて質問する。 ⑥①～⑤を１回繰り返す。 ⑦本時の授業の価値をフィードバックする。	・プレゼンター役以外の生徒は他の班に発表を聞く。 ・プレゼンター役の生徒は「活用」部分を共有する。 ・活動へのフィードバックを聞く。 ・パフォーマンスの振り返りを行う。	・ワールド・カフェのアレンジ版で、活動の成果を共有する。 ・全ての班の意見は聞き切れないので、Google Classroom を見ておくように伝える。

８　参考文献

大場浩正.(2020).「英語学習におけるファシリテーション技術の活用―ホワイトボード・ミーティング®の有効性に関する予備的実践の報告―」pp.39-54 尾島司郎・藤原康弘(編)『第二言語習得と英語教育の新展開』金星堂

杉江修治.(2011).『協同学習入門　基本の理解と 51 の工夫』ナカニシヤ出版

鈴木宏昭.(2022).『私たちはどう学んでいるのか　創発から見る認知の変化』筑摩書房

ちょんせいこ.(2016).『ホワイトボード・ミーティング®検定試験　公式テキスト　Basic　３級』株式会社ひとまち

ちょんせいこ.(2022).『13 歳からのファシリテーション　クラスで、学校で、社会で役立つコミュニケーション力が身につく本』三松社

中野民夫.(2001).『ワークショップ―新しい学びと創造の場―』岩波書店

西村勇哉.(2019).「ワールド・カフェ」(pp.32-35) 鈴木康之・嘉村賢州・谷口知弘(編).(2019).『はじめてのファシリテーション――実践者が語る手法と事例』昭和堂

北海道教育委員会・北海道大学. (2023).「探究チャレンジ・ジャパン　審査票」

松下信之・山田知弘.(2022).『４つのステップで学びが変わる！高校英語「探究する」授業のつくり方』明治図書

文部科学省.(2018).『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　英語編　平成 30 年７月』

亘理陽一.(2019).「対話実践的に英語を学ぶ」『教育』教育科学研究会編, pp.14-22, 旬報社

Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (2002). *Circles of learning: Cooperation in the Classroom (5th ed.)*. Interaction book Company, Edina, MN.

H. Lynn Erickson, Lois A. Lanning, &. Rachel French (2017). *Concept-Based Curriculum and Instruction for the Thinking Classroom(Second Edition)* Corwin. (H・リン・エリクソン, ロイス・A・ラニング, レイチェル・フレンチ. (2020). 『思考する教室をつくる概念型カリキュラムの理論と実践: 不確実な時代を生き抜く力』(遠藤みゆき, ベアード真理子訳) 北大路書房)

OpenAI. (2023). *ChatGPT*. https://chat.openai.com